

カタカナ語表記への言語心理学からの提案：

読みやすい語表記をめざして——分節表記¹

井 上 道 雄²

はじめに

カタカナ語(外来語)が、近年急激に増加している。国際化にともない、欧米文化の影響のもと今後ますます増加するものと予想される。このカタカナ語の氾濫が、日本語を乱しているという批判も多くなされてきている(柴田,1984)。また、外国人の日本語学習者にとって、カタカナ語の習得が障害となっていることも聞く(深尾,1979)。カタカナ語の増加に対する功罪はいったんおくとして、カタカナ語の読みやすさは、それ以前の問題として検討されるべきだろう。

表音文字で表記されるカタカナ語は、漢字と比べてその語認知が難しいことは明らかであろう。とりわけ、複合語などの語長の長い語では、意味の抽出が困難なものが多い。ところが、読みやすさや意味理解に配慮したカタカナ語の表記について、現在のところ一貫した規則がない。カタカナ語の表記の問題は、ほとんどが音声とその文字表記との対応関係として取り上げられてきている(文化庁文化語部国語課(編),1985, 1987; 文化庁国語課(監修),1996)。

和語や漢語は、長い歴史を経てこんにちの表記が出来上がってきた。洋語としての外来語の歴史は、16世紀半ばポルトガル船が種子島に漂着したとき以来450年余りである(上野, 1985)。外来語をカタカナで表記する歴史はさらに短く、18世紀初めの新井白石の『西洋記聞』から300年足らずである。そして、外来語のカタカナ表記が明治期に確立してから、わずか100年余りである。今後ますます増加すると予想されるカタカナ語を読みやすく、また語認知をより容易にするため、表記上の工夫が必要となるだろう。

ここでは、カタカナ語を読みやすくすることに焦点をあてて、その表記方法として分節表記を提案する。カタカナ語の語構成要素(意味要素)間に符号()を挿入することによって、分節して表記する。分節表記の目的は、氾濫するカタカナ語表記に日本語の利便性と独自性をもたせることである。利便性は、漢字一字が意味を持つ漢語表記に見られるように、カタカナ語で意味単位を分節して表記することによって、読みやすさや語の意味認知を容易にすることである。また、複合語の表記に見られるように、複数の構成語を連続したり分節したりして表記しており、表記の規則性があいまいであり、慣習的な面に依存している。さらに、分節表記に用いられる符号もまちまちなものである。独自性は、このように不統一なカタカナ語表記のため

に、分節の単位と分節に用いる符号に自立的で体系的な表記規則を持たせることを目指そうとするものである。

第1章 外来語・カタカナ語の現状

今日のカタカナ語の使用状況は、擁護論、批判論のいずれに立つにしろ、カタカナ語への意識(国語観)と日常のカタカナ語使用の状況に大きなギャップがあるだろう。それは、外来語(カタカナ語)に対して従来からなされてきた一般的な意識でもある。漢字の「真名」に対する「仮名」として、一段低い文字とした意識が今日まで続いている(山田,1997)。それは、カタカナ語の氾濫が、いわゆる「美しい日本語」を乱しているという批判になる。しかし、カタカナ語は増加する一途であり、日本語の外来語化がいつそう進むもの(樺島,1981)と予想される。その現実の使用状況について、まず外来語からカタカナ語への呼称の移行、カタカナ語の受容についての世代差、及び年代差から検討する。

第1節 外来語からカタカナ語へ

外来語は、他の言語から取り入れられ自国語として使われるようになった語のことである。そして、広い意味では、中国から取り入れた漢語も含まれるが、一般的には、主として欧米諸国の言語から借り入れたものを指している。しかし、外来語は、自国語として使われる程度、つまり日本語として国語に溶け込んでいる程度が語によって異なっている。国語審議会答申(1991年)による『外来語の表記』(文化庁国語課(監修),1996)は、その国語化の程度を日本語に融合したもの(たばこ)から、国語として熟しているが外国語の感じが残っているもの(ラジオ)、外国語の感じが多く残るもの(ジレンマ)まで三段階に分けている。「外国語の感じが残る」ことによる国語化の程度は、その外来語に対する主観的な評価によるものであり、経験的な印象であるだろう。このことは、外来語と外国語の境界があいまいであり、個々の語をその使用場面で明確に外来語として規定することが、はなはだ難しいものとなる。石野(1997)によれば、外国語は、外来語と呼ぶにはいまだ日本語に溶け込んでいない西洋語としたうえで、「最近このような外国語も外来語の中に含め」ている。このような定義となったのには、外国語の導入が量的にも時間的にも急激であり、外来語として日本語になじむまでの時間的淘汰が不十分なまま、日常使用されている背景があるだろう。

国語化の程度に加えて、外来語として和製(英)語と混種語(外来語と和語・漢語の結合)の問題がある。和製語は、その80%が英語からのもので占められている(佐藤,1994)。また、新聞紙上に現れた英語からの借用語を調査した研究(東山,1973)では、2,000例中和製英語10%弱、日英混成語40%弱であり、英語から入った語の半数近くは、日本語として手を加えられたものである(石野,1977より)。そして、このような和製語の多くは、日本語として加工された語であるかどうかは、日常の使用ではほとんど意識されていない。

以上の点から、外来語を従来の定義で捉えるよりも、カタカナ語として「外来語または和製英語・和製洋語をさす」(岸本(監修),1990)ものと規定し、それら全体をカタカナ語と呼ぶ方が実情に即しているだろう。三省堂編修所(編)『コンサイスカタカナ語辞典』(1994)が、「外来語辞典」から「カタカナ語辞典」へと名称を変えた。外国語(主に英語)が日本語として定着しないまま使用される現状に対応したものであると述べている。同様の事情を反映したものと言える。従って、われわれは、語の読みやすさを目指す表記法の立場から、和製語を含め、外国語の感じの残っている語もカタカナ語として捉えていくことにする。

第2節 カタカナ語の受容：世代・年代による意識の違い

カタカナ語の使用は、その新鮮さや流行性、原語の意味の直接さといった使用動機によるところが大きい。従って、その特徴は、新語性や専門性ということになる(石野,1977)。新語性では、一種の流行語として、短期間よく使用されやがて死語となるものが多くあることを意味している。また、専門性は、特定の専門的な領域に限定されて使用され、一般にはなじみの少ない語となる。これらのカタカナ語の特徴は、世代や時代の影響を他の語種(漢語や和語)に比べて大きく受けることになるだろう。

まず、世代差によるカタカナ語の受容の違いについて見てみよう。有識者(主に50代)と大学生の外来語感覚を比較した分析(石野,1983)では、大学生がより多くの外来語を日本語になっているもの(ライブ、ターゲット)として肯定的に受け入れている。そして、その回答の背景に、外来語への両世代の認識の違いを挙げている。有識者は、外来語を日本語に対して「よそのもの」と見ているが、大学生は外来語を特別視せず、日本語としてその使用頻度に基づいて判断している。

文化庁文化語部国語課の『平成8年国語に関する世論調査』(文化庁(編),1998)は、8語の外来語(ボランティア、インフォームド・コンセント)についての認知度(聞いたこと・見たことがある度合)と理解度(意味がわかる度合)を16歳以上の年齢を対象に全国調査している。その結果は、30代以下の若い世代を中心に認知度、理解度ともに高く、60代以上の高齢層で低くなっている。平成9年度の調査(1998)でも同様の世代差による違いが得られている。従って、外来語の受容は若年層の方が高いだろう。

佐藤(1991)は、カタカナ表記に注目して、大学生に表記と語種意識の関連を調査している。そして、外国語意識の希薄化が若者に進行していることを示した。カタカナで表記されている語への「外来」意識が失われ、表記の一形態としてカタカナで書かれるという意識である。この希薄化の要因として、幼児期における外来語の増加、日常語での外来語の増加、そしてカタカナ表記の拡大を含む語表記の多様化と脱漢字化を挙げている。カタカナ語の増加が、若年層に国語化が進んだものとして受け入れられていると言える。また、三世代(高校生・大学生・中高年)の主観的表記頻度を調査した井上ら(1997)でも、語表記の多様化が若年層で見られた。

さらに、総理府調査(1977)での外来語使用の「好ましき」の結果でも、高齢者が「好ましくない」として批判的であるのに対して、若年層では外来語使用に「別にない感じない」の反応が増加し、外来語への抵抗感が減少している(石野,1985)。従って、若い世代ほどカタカナ表記ひいてはカタカナ語への抵抗感が高齢層に比べて低くなってきていると言えるだろう。

最後に、年代による外来語増加の傾向を新語に占める外来語の比率から見てみよう。野村(1984)は、『現代用語の基礎知識』(自由国民社)を用いて、新語に占める語種の構成比を1960年版と1980年版で比較している。漢語での新語の比率(40.2%と28.8%)に対して外来語による新語が、高い比率を占めている(43.1%と57.6%)。そして、80年版では外来語の新語が急増し、漢語の二倍に増加している。この新語の比率からも、年代が下がるにつれて外来語が増加していることが明らかである³。

以上の諸点から、今後若年層を中心にカタカナ語に対する抵抗感はますます減少していくものと思われる。そして、カタカナ語の使用は、ますます増加するものと予想される。

第2章 カタカナ語を分節表記する

第1節 分節表記と翻訳語

分節表記、つまり外国語を下位の意味単位に分節して表記することは、決して目新しい方法ではない。翻訳語は、外国語を翻訳して日本語の概念に取り入れたことばである。例えば、Psychologyを「心理学」、jewel boxを「宝石箱」、automobile carを「自動車」と訳した。そこでの翻訳作業の一つは、原語を下位の意味単位に分けて、その意味を表す日本語を対応づけることである(鈴木,1996)。そして表記される漢字熟語は、語を構成する漢字によって、「心の理についての学問」、「宝石を入れる箱」、「自ら動く車」としての意味を表している。これらの漢字熟語は、漢字一字によってその意味を表すとともに、語を構成する文字間を分節して表記する機能も備えている。カタカナ語の分節表記は、この漢字の文字単位による表記に対応する働きをもつものと言える。それによって、各分節単位と意味を対応づけることが容易となるだろう。

漢語・翻訳語は、漢字一字一字が意味概念を持つことからその意味をある程度まで類推できる。しかし、外来語の場合には、その原語の意味についての知識が漢字に比べてかなり貧弱なものである。丸谷(1978)が指摘するように、「外来語は一つ一つの言葉をまるごと覚えるしかなくなり、しかもその言葉は、その意味に固定されて、つまりせつかく取り入れても応用がきかない」ことになる。しかし、第1章でも述べたが、今日のカタカナ語の氾濫の背景には、近年の日本人、特に若年層の外国語(その主なものは英語であるが)へのなじみが増加したことによると言える。この時代的背景を考えれば、一語一語をまるごと覚えることなく、語の構成単位(意味要素)から意味の類推がかつてより容易になったと言える。そのため、分節表記は、意味単位での学習という点からも有効な方法であるだろう。そして、分節表記による意味単位は、その意味単位を核にして造語機能を高めることが出来ると思われる。実際に、和製英語は日本

語化の進んだ意味単位の造語力を示すものである(佐藤,1994)。それは、語の構成単位を用いた日本語への応用、同化であり、意味理解が外来語のサブ単位でなされていることを示している。

カタカナ表記は、表音性を重視した表記である。オノマトペや会話での流行語を表記するのに、適切なものといえる。しかし、外国語のカタカナ表記では、その表音性ととも、その意味をより認知しやすいように表語性を明確にすることも重要なものとなる。カタカナ語を分節して表記することは、従来の翻訳語と通じるような方法であるだろう。無論、漢字の持つ表語性に及ぶべくもないが、分節表記はカタカナ語の意味単位を明確にし、その表語性を高めて語認知を促進する手だてとして有効なものになると思われる。

第2節 現行のカタカナ語(外来語)表記 — 辞書・辞典

カタカナ語をサブ単位に分けて表記する方法は、新聞や辞書等で従来からもとられて来ている。カタカナ語を読みやすくまた理解しやすくするための分節表記そのものは、決して新規なものではない。ここで取り上げたいのは、カタカナ語を表記するときの規則であり、統一性や一貫性についてである。

現在出版されている辞書、辞典類での分節の単位と、そこで用いられている分節記号について見ていく。まず、分節単位であるが、単一語はそのまま単一な綴りとして表記されている。問題となるのは、複合語の表記である。複合語は、原語が二つもしくはそれ以上の単語が結び付いて一語を形成するカタカナ語である。複数の意味単位が結合して一つの意味を構成する点では、漢字の熟語に相当すると言えるだろう。では、複合語は、どのように表記されているのだろう。

最近出版されたカタカナ語の事典である講談社(編)『最新カタカナ用語「読む見る」事典』(1998)は、単一語間を連続表記する語(ラブストーリー)と、中黒(・)を挿入して分節表記している語(アイ・キャッチャー)がある。両表記間には、一貫した規則はみられない。長い綴りで熟知性の低い語の場合に中黒を挿入することが多いようである。しかし、アメリカズ・カップ・レースは分節表記されているが、オープンウォータースイミングは連続して表記されている。そこには、複合語に対する一貫した規則は認められないようである。

この点について他のカタカナ語(外来語)辞書・辞典を見てみよう。三省堂編修所(編)『コンサイスカタカナ語辞典』(1994)は、その「使用上の注意」で、複合語の表記規則を示している。原語が二つ以上の単語からなる複合語は、原語のハイフンの有無にかかわらず(-)を挿入し、見出し語の各要素の区切りを示している(アイス-クリーム-ソーダ [ice-cream soda])。あらかわ(1977)の「外来語辞典(第二版)」では、見出し語の表記の基準として、2語以上からなる複合語は、スペースを挿入してわかち書きにしている(アイス クリーム)。しかし、「複合語がさらに別の語と結合して、別な複合語をつくるばあい、はじめの複合語はわかち書きにしない」ことになる(アイスクリーム コーン)。

国語辞書・辞典類では、市川ら(1988)『現代国語辞典』は、複合語を連続して表記している(アイスクリーム)。新村編(1991)『広辞苑(第四版)』は、複合語は、語間にハイフン(-)を挿入することによって分節表記している(アイス-クリーム)。原語にハイフンのあるものもそのままハイフンを挿入している(クローズ-アップ [close-up])。また、接辞が日本語になじみのあると思われる場合には、その間にハイフンを挿入している(サブ-ウェー [subway]、サブ-タイトル [subtitle])。辞典の表記方針として、語構成を示すために漢語・和語の見出しもハイフン(-)によって分節していることとの一貫性によるものとも思われる。しかし、アーム-チェア (armchair) が分節表記されているのはどのような理由によるのであろうか。

最後に新しいメディアでの表記を見てみよう。松村(監修)『CD-ROM版 大辞泉』(1997)は、複合語はハイフンの挿入によって分節され(アイス-クリーム)、原語でハイフンのあるものはそのままハイフンが挿入されている(アイス-スケート)。また2語以上の複合語には、各語間がハイフンによって分節されている(ジュニア-ハイ-スクール、スターズ-アンド-ストライプス)。しかし、ショッピングバッグ-レディー (shopping-bag lady) のように最初の複合語を連続表記している例がある。

以上に見てきたように、辞書・辞典類でのカタカナ語の分節表記は、各辞書内での編集上の一定の規則はあるが、あいまいな点が多く含まれている。辞書全般については、カタカナ語表記の統一した規定はないといってよい。また、分節のために用いられる記号も、辞書間でそれぞれ異なっている。中黒(・)、ハイフン(-)、分ち書き、つまりスペース()であったりしており、分節記号の表記にも一貫性は見られない。

第3節 カタカナ語の分節表記の現状 — 規則

カタカナ語の表記を規定した資料として、新聞の用字用語集がある。新聞記者が記事を書く際の基準にしている「記者ハンドブッカー新聞用字用語集(第8版)」(共同通信社(編著),1997)や「朝日新聞の用語の手引」(朝日新聞社用語幹事(編),1997)等である。外来語の書き方についてはほぼ同じ内容なので、「記者ハンドブック」から引用する。それによれば、「外来語の書き方、用例」での分節表記の規則は、次のとおりである。

「19. 二語からなる複合語には、原則として語間に「・」をつけない。ただし、判読に困難な場合は、この限りではない。三語以上からなる複合語には、原則として「・」をつける。ただし、それぞれの語の独立性が希薄で、判読が困難な場合には「・」を省略してよい。」例として、次の語があげられている。インフォームドコンセント、ウォーミングアップ、ケース・バイ・ケース

「20. 片仮名の地名・人名などの固有名詞と、一般外来語とが複合する場合は、その間に「・」をつけて区別をつける。ただし、固有名詞としての意識が、すでに薄れている場合や一語とみなせる場合には、この限りではない。」例としては、次の語である。

ウルガイ・ラウンド、ノーモア・ヒロシマ。例外は、ディーゼルエンジン、デビスカップである。

外来語の表記は、複合語でも1語として表記し、分節を避けることを基本的な方針としていることがうかがわれる。また分節記号には、中黒(・)が用いられている。

外来語表記についての国の施策を見てみよう。内閣告示『外来語の表記』(平成3年)は、「一般の社会において現代の国語を書き表すため」に定められている(文化庁国語課,1996)。語表記については、「本文」の「留意事項その2(細則的な事項)」の「Ⅲ 撥音、促音、長音その他に関するもの」の最後の項目8で下記の内容である。

「8. 複合した語であることを示すための、つなぎの符号の用い方については、それぞれに分野の慣習に従うものとし、ここでは取り決めを行わない。[例] ケース バイ ケース ケース・バイ・ケース ケース-バイ-ケース マルコ・ポーロ マルコ=ポーロ」

例の語からすれば、分節記号は分ち書き(スペース)、中黒(・)、ツナギ(=)のいずれでもよいようである。また、「つなぎ符号」の名称から、複合した原語を一語としてつなぐ表記法の考えに立っている。われわれの目指す分節表記、意味要素に基づいて語を「わける」表記法、とは異なる考えである。そして、はじめにも述べたが、外来語の表記として扱われてきた問題は、その大部分が外国語の原音とカタカナ表記についての原則の問題である。われわれが言うカタカナ語の文字列の表記方法については、ほとんど検討されていない。

以上に見てきたように、カタカナ語の分節表記には一貫した統一的な原則は見られない。複合語でも連続で表記されたり、分節されたりしている。分節表記される場合でも、その方法は、主に慣習に依存したものである。一般に熟知されている語には、例えば分節記号の中黒(・)を省略したり、熟知性の低い語には挿入して分節する。しかし、カタカナ語の熟知性やそれによる判読の容易さ、更には語としての単一性といったカタカナ語のもつ属性は、日常の経験的な意識の問題である。目下とられている方法は、恣意的なものと言わざるをえない。

われわれが提唱する分節法は、そのようなあいまいな基準にとらわれない表記方法と言えるだろう。また、原語の語構成によるカタカナ語表記への拘束力を緩めることができるだろう。例えば、複合語が一語として表記される語(cyberspace, taxpayer)と、複数の語として分かち書きされる語(science fiction)がある。あるいは、原語がハイフンで結びついている複合語(eye-camera)と、そうでない語(eyecup)がある。われわれの分節表記方法は、このような原語の表記を意識する煩雑さを避けることができるだろう。

第3章 カタカナ語を分節表記する利点

分節表記する利点は、先の翻訳語との比較で少し触れた。ここではカタカナ語の特性との関連で検討する。その利点は、国語学と言語心理学(認知心理学)の二つの側面からあげられる。

国語学からの利点として次のものがあるだろう。分節表記は、原語の意味単位を表記の上で明示できることである。そして、語を分節表記することによって、構成単位のレベルでの意味を表記から認知できることである。構成単位による意味の理解は、サブ単位での意味情報が形成し易くなり、その意味単位のレベルで他の語の理解を促進するだろう。それは、構成単位での語間の関連性がより明確となり、関連語の意味の推測が容易となる。例えば、ジェットエンジンは、ジェット_エンジンと分節表記することによって、ジェットとエンジンの構成単位での意味認知が表記上から容易となる。そして、それぞれの意味単位が、それを含む語の理解を促進するだろう。ジェット_コースターやエンジン_ブレーキといった語の意味を。このような構成要素による意味理解は、漢字の熟語による意味理解の働きに似ている。「分節」の意味が、その構成要素から「分けて」「節にする」ことであることを理解できるように。

分節表記の二つ目の利点は、カタカナ語の造語力を高めるのに役立つことである。石野(1977)は、カタカナ語の意味単位が日本語としての造語力をもっていること示している。外来語「アップ」が、レベル_アップ、ベース_アップ、イメージ_アップ、コスト_アップ等の複合語を造り、さらには、和語・漢語とも結合してアップ幅、賃金アップを造る。多くの批判を受けている和製(英)語は、その点から見れば、外来語の造語力を反映しているといえる。さらに、外来語の語形の長さが造語力をなくす(大野,1976)との主張に対して、意味による分節表記は外来語の造語力に少なからず寄与するだろう。

第三の利点は、適切な長さでの表記である。外来語は、一語が長く、拍数で9・10拍といった長さは決して珍しいことではない。特に和製語は、複合語が多いことから語長が長くなる。石野(1983)によれば、『外来語の語源』(吉沢・石綿,1979)で平均5.95拍であり、『日本語発音アクセント辞典』では平均6.70拍(菅野 謙調査)であった。この語形の長さは、造語力の低下のみではなく、3拍4拍を基本単位とする七五調五七調の日本語のリズムを壊してしまうことが指摘されている(樺島,1981)。分節表記は、原語の意味単位に基づいて、長い語形を適切な拍数の単位に分けて提供できるだろう。

第四の利点は、表記時に原語の単位にあまり煩わせずすむことである。分節表記は、日本語としての意味単位に基準が置けることから、原語が単一語か複合語かに関係なく表記できる。

次に、言語(認知)心理学からの分節表記の利点を考えてみよう。先にも述べたように、カタカナ語は、漢語や和語に比べて音節数が長くなる。例えば、インフラ_ストラクチャー(infrastructure)は原語では4音節であるが、カタカナ語では10音節(拍)となる。人間が一瞬に認知できる範囲である直接記憶は、 7 ± 2 の範囲であると言われている(Miller,1956)。カタカナ語には、この直接記憶範囲を越える語が多くある。分節表記は、語長を小単位に分けることによって、この記憶への負担を軽減できるだろう。そして、分節単位が3～5音節(拍)になれば、語を構成する各分節単位内での語認知が容易となるだろう。

このことは、カタカナ語とカタカナ文字のもつ特性とも関係している。カタカナ語のもつ新

語性、専門性、一過性の特徴は、一般に語の熟知性が低いことでもあるだろう。意味の切れ目が、熟知性の高い語に比べて分かり難いだろう。下位の意味単位への分節は、読み単位を示し、見られない語の読みの難しさを軽減することができる(井上,1998)。

最後に、カタカナ文字の形態について考えてみよう。漢字は無論のこと、同じ表音文字である平仮名と比べても文字内の形態の類似性は、カタカナ文字がもっとも高い。カタカナ文字が、主に少数の直線的な構成要素より成っているためであろう。また、他の文字体系との関係で言うならば、ひらがな交じり文が、カタカナ交じり文よりも読みやすいと思われる。カタカナの直線的な文字構成要素が、ひらがなの曲線的な構成要素と比べて、漢字の直線的な構成要素と類似するためによるものと考えられている(武部,1982)。このようなカタカナ文字間の類似性による表記上の欠点を、分節表記で小単位にすることで、語の認知性を高めることができるのではないだろうか。

第4章 分節表記の方法

第1節 分節単位と分節数

カタカナ語の分節単位を決めるにあたって、まず語構成に基づく分節可能な個所を見てみよう。カタカナ語には、その語構成単位と単位間の結びつきから、主に以下のタイプがあげられるだろう。

1. 原語が単一語

- ①単一の意味要素(ゲスト [guest])
- ②複数の意味要素(ゲスト_ハウス [guesthouse]、オーバー_コート [overcoat])
- ③接辞(接頭・接尾)を含むもの(アンチ_ヒーロー [antihero]、オート_フォーカス [autofocus]、ソシオ_グラム [sociogram]、インフォメイ_ション [information])

2. 原語が複合語

- ①二語以上から成る分離した語・句(ゲスト_ルーム [guest room]、ケース_バイ_ケース [case by case]、オン_ザ_ロック [on the rocks])
- ②語間がハイフンで結ばれた語・句(ブルー_カラー [blue-collar]、タイム_シェアリング_システム [time-sharing system]、ギブ_アンド_テイク [give-and-take])

3. 和製(英)語

- ①外国語と日本語の結合(日英混成語)(ボーダ_レス [borderless] 時代、環境アセス_メント [assessment])
- ②外国語と外国語の結合(テーブル_スピーチ [table+speech])
- ③外国語と外国語の接辞(ナイト_アー [night+er])

4. 和略(英)語

- ①単一語での省略(テレビ [television]、イラスト [illustration])

②複合語での省略(パソコン；パーソナル_コンピュータ [personal computer])

語の分節単位は、これらのカタカナ語の語構成と語間の結合の種類に基づいたものとなる。単一語では、語基と接辞に分節位置を置くことができる。また複合語では、原語がハイフンで結ばれている語も含めて、構成単位語間がまず分節位置となるだろう。そして、その各構成単位語内では単一語と同様の個所が分節位置となる。和製語については、外国語と日本語の混種語ではカタカナと漢字・仮名との表記形態が異なることから、分節単位が明確でありカタカナ表記の部分が上記と同じ位置で分節されるだろう。その他の和製語は、複合語と同じ所が分節位置となる。そして、和略語も同じ位置で分節できるだろう。

このような意味要素を単位として分節した場合、その意味単位が明確となり語の構成が理解しやすくなる。しかし、過剰な分節は、カタカナ語を書く筆記行動の面からも、また語を認知して読むといった情報処理の面からもかえって煩雑で語の理解を難しくすることにもなる。そこで、過剰分節を避けるために分節数に制限を設けることは、情報処理の面から必要であるだろう。そして分節数の制限にともなって、分節個所の重みづけが必要となる。

まず、人間の情報処理の観点から文節数を考えてみよう。人間が一瞬に認知できる数は、直記憶範囲として 7 ± 2 といわれていることはすでに述べた。語では、その熟知性や文字間の弁別性やさらには文字の母集団の大きさといった諸要因によって異なるだろう。これらの問題は情報処理において重要ではあるが、単純に文字数による適切な分節数を検討する目的から、ここではこの問題には深く立ち入らないことにする。ただ、7文字を超える語長のカタカナ語は、分節して表記される対象となるだろう。

では、分節される際の適切な文字数は、何文字であろうか。日本語は、3拍から4拍の単語が多い。その中でも漢語は、全体の半分以上が4拍語であると推定されている(金田一,1988)。樺島(1981)は、分節の長さについて調査している。『万葉集』『古今集』の短歌の一分節が2拍から5拍のものが多く、それだけで分節全体の90%を超える。短歌と言う文字数が制限された特定の領域ではあるが、文を区切るといった意味では参考となる長さである。また、菅野(1985)は、外来語(洋語)の省略形を調査している。語長の長いカタカナ語が短縮されて略語となるには、その長さが日本語の中に溶け込む過程で経験的に適切なものになっているものと解釈できるだろう。調査結果は、外来語が短縮されて4拍になるのが最も多く31.8%、次いで3拍が28.0%であり、2拍から5拍の短縮形で全体の85.4%を占めていることを示した。

このような拍数についての調査研究の結果を参考にするならば、カタカナ語の分節単位は2拍から5拍の範囲で、3・4拍が適切な長さであると言えるだろう。

分節数の制限を設けるのにもなっ、分節位置の優位性が次に問題となってくる。分節は、意味要素を基本として分けられることから、その分節位置は意味の大きな切れ目が優先される。カタカナ語の語構成の分類で見たように、その分節の優位性は次の順序になると考えられる。

①原語が複合語である場合の構成語間の位置(語間がハイフンで結ばれたものや句も含む)

②原語が複数の語基から成る単一語では、その語基間の位置 ③単一語や構成語内では接辞と語基間の位置。そして、和製(英)語もこの分節順位に従うものである。これらの語構成の特性による分節位置に加えて、さらに日常の言語生活で習慣化されている単位での分節も一つの要因として考える必要があるだろう。

第2節 分節記号

カタカナ語を分節して表記する方法は、従来から慣習的に行われてきていることはすでに述べた。複合語であるカタカナ語を分節する場合に主に用いられてきている。それは、各構成語を基本単位と考えるならば、その語間を結び付ける方法でもある。そして、分節に用いられている記号は、カタカナ語辞書・辞典を中心にしてみると主に三種類がある。一つは、分節位置にスペース()を挿入する方法である(あらかわ,1977)。分ち書きの一種である。一つは、中黒(・)である(三省堂編修所(編),1994、学習研究社(編),1989)。新聞の表記では、この分節記号に統一されている(共同通信社(編著),1997)。いま一つは、ハイフン、あるいはツナギテン(-)である(樺垣編,1972)。

他方、内閣告示の『外来語の表記』(1991)は、複合語を統一した規則で分節して表記することを取り決めないと表明している。「複合した語であることを示すための、つなぎ符号の使い方については、それぞれの分野の慣用に従うものとし」ている。そして、スペース(ケース バイ ケース)、中黒(ケース・バイ・ケース)、ハイフン(ケース-バイ-ケース)、およびツナギ(マルコ=ボーロ)符号の例を挙げている。

これらの分節(あるいは、つなぎ)符号のうちスペースとハイフンは、原語での分節に用いられている記号であり、カタカナ語表記時に混同されることになる。例えば『The Concise Oxford Dictionary (Ninth Edition)』(Thompson (ed.),1995)でiceの見出しをみると、スペースで分節されているものにice axe, ice bucket, ice cap, ice cream, ice dancing等があり、ハイフンが挿入されているものにice-bag, ice-boat, ice-bound, ice-cold, ice-skateがある。さらに、複数の語基から成る単一語で、分節されずに連続表記されるものがある。iceberg, icelink, iceblock, icebox, icefall等である。このことは、これらの記号をカタカナ語の分節記号として用いるには、原語での使用ルールとの違いによる表記上の混乱をもたらすことになる。

また、中黒(中点)記号は、日本語の区切り記号として一般に使用されている。『記者ハンドブック』や文部省教科書局調査課国語調査室『くざり符号の使い方【句読法】(案)』(文化庁(編),1995)によれば、中黒はカタカナ語以外に、①単語の並列の間 ②少数点(縦書) ③年月日の表し方 ④省略符号 ⑤判読しやすくするため 等の目的で用いられている。従って、中黒を分節記号として用いることは、これらの区切り記号の働きとの間に混乱が生じることとなるだろう。

これらの符号との重複、混乱を避けるために、われわれは分節記号として、半角のアンダーバー(_)を提唱する。すでに本稿でも用いてきているように、分節位置に(_)を挿入すること

によって、カタカナ語の意味的構成単位を明示する方法である(アイス_クリーム)。横書の場合は構成単位間の下部に、縦書では左側に挿入する。

アンダー_バーを用いる第一の利点は、以上に述べたように、日本語で現在用いられている記号と競合しない点である。文部省編『国語の書き表し方』(1950)(尚学図書(編),1995)での句読点の使い方には、くぎり符号約20種の中に()は含まれていない。類似した記号にワキセンがあるが、ワキテン(読者の注意をうながす語句にうつ)と同じ目的で主に用いられる。アンダー_バーは、日本語の文章では通常使用されない符号である。従って、他の符号との混乱が避けられ、表記上の差別化がしやすいだろう。第二の利点に、この符号は、スペース()の機能もあわせ持つものと言える。この点でも表記上の差別化が容易となるだろう。同時に、形態的にも目障りになりにくいものである。最後に、筆記での利便を考えた場合、従来使用されている符号と比べて大きな遜色は見られないだろう。ワー_プロ筆記においてもキー_ボード上にあり、入力が容易である。

以上より語認知および筆記の両面から考えて、カタカナ語の分節記号としてアンダー_バーは分節表記に有効な機能を持つと考えられる。

おわりに：「新しき袋に新しき酒を」

漢字表記を主とした従来の表記システムは、カタカナ語表記にとって同じ袋に異なる酒を入れるようなものであるだろう。新酒が袋になじむまでには時間がかかるし、また袋が新しい酒を入れるにはそぐわないものとなってきた。その理由は、一つは、外国からの情報が、国際化(特に欧米のからのコンピュータに代表される科学技術概念や社会概念やマスコミ等)に伴い大量になったことである。もう一つの理由は、それら新情報は、急速に導入されるとともに、その多くが日本語に定着する以前に消えていくことである。従来のシステムに取り込む前に使用されなくなってしまう。情報時代においては、ことばとその対象〈もの〉の結びつきが希薄なものとなってきたといえる。そして、外国語を日本語の中で消化するための十分な時間的余裕がなくなってきた。

ことば(単語)は、安定した社会状況のなかでは、時間とともに日本語の備品としてその位置を占めることができた。つまり、外来語となるに十分な手続きを踏むことができた。しかし、先に挙げた理由から、ことばは、消耗品となってきた。外国語のままで、あるいはカタカナ語のままで、日常的な使用場面から消えていってしまう語が増えてきている。このような言語状況では、新たな表記システムが必要となる。カタカナ語(外来語)をより認知しやすくする新表記システムである。新しき酒を入れる新しい袋である。

その袋は、必ずしもパーマメントである必要はないだろう。いわば、そのことばが、日本語のなかで発酵するまで(外来語として日本語の中に定着する)の一時的な表記システムと考えておけばよい。従来から、外国語の表記にカタカナが用いられてきた。しかし、その表記には、

十分な工夫がなされてきたとはいえない。むしろ一時的な借り物であるかのごとくである。そのために、外国語のカタカナ表記は、二次的なものとしての扱いを受けてきているのではないだろうか。それならば、いっそ一時的なものとして、より認知しやすい表記法を工夫すべき段階にきているのではないだろうか。単に外国語を拒否することは得策ではないし、現実の状況は、外国語の影響抜きには日本語の言語環境を考えることは出来ない。われわれは、氾濫する外国語のカタカナ語を手なづけ、日本語に取り込む方策を考えるべきである。本稿で提唱した分節表記は、そのひとつの試みである。

引用文献

- あらかわ そおべえ 1977 外来語辞典(第二版) 角川書店
朝日新聞社用語幹事(編) 1997 最新版 朝日新聞の用語の手引 朝日新聞社
文化庁(編) 1995 言葉に関する問答集(総集編) 大蔵省印刷局
文化庁(編) 1998 言葉に関する問答集-外来語編(2)(新「ことば」シリーズ8) 大蔵省印刷局
文化庁国語課(監修) 1996 現行の国語表記の基準[第5次改訂] ぎょうせい
文化庁文化部国語課(編) 1985 国語施策沿革資料6 外来語資料集(諸案集成その1) 文化庁文化部国語課
文化庁文化部国語課(編) 1987 国語施策沿革資料8 外来語資料集(諸案集成その3) 文化庁文化部国語課
文化庁文化部国語課 1998 世論調査報告書平成9年度 国語に関する世論調査(平成9年12月調査) 大蔵省印刷局
深尾凱子 1979 カタカナことば サイマル出版社
学習研究社(編) 1989 カタカナ新語辞典 学習研究社
東山節子 1973 日本語における英語からの借用語 東京女子大学付属比較文化研究所紀要, 34, 37-58.
市川 孝・見坊豪紀・金田 弘・進藤咲子・西尾虎弥 1988 現代国語辞典 三省堂
井上道雄・杉島一郎・賀集 寛 1997 主観的表記頻度と世代差-高校生・大学生・中高年 神戸山手女子短期大学紀要, 第40号, 41-49.
井上道雄 1998 カタカナ語の分節(セグメンテーション)表記-読み速度実験(単語と擬似語) 関西心理学会論文集(大阪教育大学), 25.
石野博史 1976 外来語の表記-語形・表記のゆれ- (日本語講座第4巻『日本語の語彙と表現』 鈴木孝夫編) 大修館書店
石野博史 1977 外来語の問題(岩波講座日本語3『国語国字問題』) 199-229, 岩波書店
石野博史 1983 現代外来語考 大修館
石綿敏雄 1985 日本語のなかの外国語 岩波書店(岩波新書)
樺島忠夫 1981 日本語はどう変わるか-語彙と文字 岩波書店(岩波新書)
菅野 謙 1985 洋語の省略形 日本語学, 明治書院, Vol. 4 (9月), 54-64.
河出書房新社(編) 1993 ことば読本 外来語 河出書房新社
金田一春彦 1988 日本語新版(上) 岩波書店(岩波新書).
岸本重陳(監修) 1990 カタカナ語・略語辞典 旺文社
講談社(編) 1998 最新カタカナ用語「読む見る」事典 講談社
共同通信社(編著) 1997 記者ハンドブック-新聞用字用語集(第8版) 共同通信社
丸谷才一 1978 日本語のために 新潮社(新潮文庫)
松村 明(監修) 1997 CD-ROM版大辞泉 小学館
Miller, G.A. 1956 The magical number seven, plus or minus two: Some limits on our capacity for processing information. *Psychological Review*, 63, 81-97.
日本経済新聞 1998 「日本語シンポジウム 21世紀の日本語-社会が変わるとことばが変わる」(11月3日開催)
野村雅昭 1984 語種と造語力 日本語学, 明治書院, Vol. 3 (9月), 40-54.

- 大野 晋 1976 日本語対談集 日本語の探求 集英社
三省堂編修所(編) 1994 コンサイスカタカナ語辞典 三省堂
佐藤栄作 1991 若者のカタカナ使用と外来語表記—語種意識から 日本語(7月), 明治書院, Vol.10, 76-88.
佐藤 弘 1994 外国語と日本語のズレ 八潮出版社
柴田 武 1984 外来語は日本語を乱すか 国語学(5月)[河出書房新社(編)1993 ことば読本 外来語 河出書房新社, 132-156]
新村 出(編) 1991 広辞苑(第四版) 岩波書店
新村 出(編) 1998 広辞苑(第五版) CD-ROM版 岩波書店
尚学図書(編) 1995 新しい国語の表記(第2版) 小学館
武部良明 1982 読みやすさから見た表記史(講座日本語学6『現代表記との史的対照』宮岡健二・宮地 裕・寺村秀夫・川端善明編) 明治書院, 186-207.
Thompson (ed.) 1995 The Concise Oxford Dictionary (Ninth Edition). New York, Oxford University Press.
上野景福 1985 西洋外来語—その歴史と問題点— 日本語学, 明治書院, Vol.4(9月), 32-42.
煤垣 実(編) 1972 増補外来語辞典 東京堂出版
山田尚勇 1997 情報化社会の国際化と日本語 学術センター紀要, 第9号, 33-71.
吉沢典男・石綿敏雄 1979 外来語の語源 角川書店

註

1. 本研究は、平成10年度科学研究費補助金(創成的基礎研究費)「国際社会における日本語についての総合的研究」(課題番号09NP0701)研究代表者 水谷 修による成果の一部である。
2. 本稿をまとめるにあたって、ヴィクトリア大学言語学科Joseph F. Kess教授に感謝します。氏は、日本語学習者にとってカタカナ語の学習・理解がたいへん難しいことを指摘され、その議論を通してカタカナ語の語認知・読みやすさへの問題意識を私に植え付けられました。本稿は、その問題へのひとつの答案であります。
3. 本稿出稿後に出版された『広辞苑(第五版)』(1998)では、23万語の見出しのうちカタカナ語が10.2%で、7年前の第四版の9%より増加している。また、新しく収録された1万語のうち3分の1がカタカナ語である。(日本経済新聞, 1998)